

『おばけと物語』

毎日小學生新聞編
「知る知るシリーズ」
文・梶田 弘武
え、たかはしのりこ
現代書館 500円

「子ども本」とバカにしていると、とんでもないパンチをくらうことがある。この本など、そのいい例である。大人も知らない世界にグイグイとひっぱりこんでくれるのである。読むにしたがい、「ヘーなるほど」と思わしてくれろ。「おばけ」と製鉄、一見なんの関係もないと思われることである。これを、多くの事実と説得力をもって「おばけのルーツはタタラ師たちにある」ということを証明してくれるのである。それだけではない「桃太郎」も、「金太郎」も、そして「花咲爺さん」までが、「製鉄」に関係ありと言うのだからおどろきである。

おばけと製鉄の関係から例をあげてみよう。「一つ目小僧」は、タタラ製鉄の技師長＝村下(むらげ)のことではないかという。村下は炉の中の温度や鉄のごきごきあいを、ホド穴という穴からのぞきこみ、炎の色を見てしらべる。したがって、年をとった村下たちの知くが目を悪くしたという。

それを、両目で見にくいので片目でホド穴からのぞきこんでいたようです。そうすることが、目を長もちさせる手段でもあったのだしょう。

片目を悪くするのは、いわば、タタラ師たちの「職業病」であったのだしょう。実際に、最後の村下である堀江さんのゴトバを引用したりして説得力があります。それだけではありません。日本の鍛冶の祖先の神様は「天目一箇神」(あまのまひとつのがみ)と言うから、おどろきです。

さらには、ホットコノ面が片目であることも、ここに由来するというからびっくりです。

もうひとつ、おばけの例をあげてみる。「からかさのおばけ」である。これもまたタタラと関係あるというのである。年に「片目」＝「二つ目」がついていることは、「一つ目小僧」の話からわかる。では、「一本足」なのはどうしてでしょう。タタラ製鉄において、炉のなかに送風しつづける作業はたいへんなものである。吹るを三日三晩、休みなく、何人かの「着子」(ばんこ)によって交代しつづおこなわれる。「かわり着子」というゴトバはここからきている。さて、この着子の仕事は、片足で吹るを踏む、たいへんな重労働であるから、足を悪くすることも充分に考えられる。だから「一本足」であるというのだ。なんとそうなる話ではないか。

では、「傘」であることは、どう説明するのだろうか。「一本足」で「傘」というのもわからないでもないが、これについてもさっさと説明してあるのだ。タタラ師たちは、高温の炉の前で作業します。それを少しでもやわらばるために、青草の笠を頭からさっぽりとかぶっていたといはる。その青草の笠が傘のおばけに結びついたのでは…というのです。みごとな騙(だま)りです。これが、また「山田の中の一本足のカカシ」にまで関係ありというのです。

でも、またどうして、歴史をつくり、文化をつくらせてきた貴重な「鉄」その「鉄」をつくらせてきたタタラ師たちを「おばけ」にしてしまったのだでしょう。ここで思い出したのは、以前に、地下墓舎で、十種の「天見屋たたら跡」に行ったときのことです。その解説板に、たしか、里の村人(農民)との交渉を規制されていたことが書いてあったように思う。「物鉄七里に炭三里」と言われるように、石鉄と木炭を求めての製鉄集団が惣仕集屋(そうじしむい)であることも関係するのかもしれない。このあたりの話があるところにおもしろいと思った。

「桃太郎」「金太郎」「花咲爺さん」と製鉄との関係については、自分で読んで楽しんでください。子どもにも読んで聞かせるのもいい。きっと、よろこんでくれると思いますよ。

「鉄づくり」に興味ある人はぜひ読んで下さい。

(梶田)